信州の自然と神社

信州大学理学部
島野 光司

神社の榊（サカキ）はサカキばかりではない

玉串に使われたり紙垂（しで）をつけて鳥居につけられたりする樹木・神籬（ひもろぎ）は，一般にはサカキ（ツバキ科サカキ属）です．サカキが用いられる一つの理由は，常緑の葉だということです．枯れ落ちることのない緑の葉に神気が宿ると考えられているためです．ちなみに榊という字は漢字ではなく，国字です．日本でこの木を神事に使うことが多いためにこの形の字になったといわれています．

しかし，西日本，あるいは関東の平野部では一般的な常緑広葉樹も，東北日本や標高の高い地域では一般的ではありません．寒い地域では，常緑針葉樹（スギやヒノキ，あるいはウラジロモミ，シラビソなど）を除けば，落葉広葉樹が多く生育しています．

落葉広葉樹とは，コナラやミズナラ，ブナ，各種サクラなど，冬に葉を落とす樹木です．冬に寒い地域に常緑の葉が生育していると寒さで葉の中の水が凍り，膨張し，葉の細胞を壊してしまいます．冷蔵庫で一度霜に当ててしまったホウレンソウやコマツナなどの菜っ葉が，フニャフニャになってしまうのと一緒です．

では，サカキが自生しないような寒い地方では，どんな樹木が代わりに使われているのでしょうか．神社境内に自然の植物が多く残るため，私（島野）もあちこちの神社に訪れることが多いのですが，松本平周辺の神社では，ソヨゴという樹木が使われることが多いです．ソヨゴはモチノキ科モチノキ属の樹木で，常緑なのですが，この松本周辺の山地にも多いのが特徴です．関東ではあまり見られませんが，富士山周辺やこの長野県の標高600-800m，他の常緑樹が生育できないようなところまで分布しているのが特徴です．この地域でほとんど唯一の常緑広葉樹であるソヨゴを榊の代わりに使うのは，当然のことでしょう．

イチイを使った例．長野県護国神社
松本市

ソヨゴの例．麻績神明宮
麻績村

もっと標高の高いところにある神社，戸隠神社ではなんとアカミノイヌツゲが使われていました．これは，植物をよくご存じの方なら分かるとおもいますが，土壌のない岩塊の山稜に生育するものです．標高 1900m の戸隠山のふもと，天照大神が天の岩戸に隠れた時に岩戸を開いたとされる天手力雄命（あめのたぢからおのみこと），そのとき知恵を授けた天八意思兼命（あめのやごころおもいかねのみこと）をまつった戸隠神社ならではといえます．アカミノイヌツゲはまさにそうした岩山に生育する樹木です．

アカミノイヌツゲの例
戸隠神社中社（長野市．旧戸隠村）

そのほかを見ますと，長野県護国神社ではイチイ（常緑針葉樹，イチイ科イチイ属）を，松本市県（あがた）の県神社ではササの枝を使っていました．いずれも常緑の葉を持つものです．地域に生育する常緑の植物をうまく利用した祭祀の方法だと思います．ちなみに，イチイの木は諏訪大社・下社秋宮のご神木でもあります．

神社林（社叢，しゃそう）の環境保全的役割

松本市内にも多くの神社があり，境内には様々な植物が生育しています．神社の森（杜，もり）は，神様（神気）が降りてくる舞台として，なるべく手をつけずに自然の状態に維持されてきました．これが神社林，社叢（しゃそう）です．よく社寺林，として神社やお寺の林をまとめて呼ぶことがありますが，お寺の境内は，基本的に「庭」です．手入れがされています．ですから，必ずしも自然状態ではありません．「あじさい寺」などというのを聞くのも，これはお寺の境内，すなわち庭にアジサイが植えられ，育てられ，それが名物になっているお寺です．「あじさい神社」というのを聞いたことがないのはこうした理由です．

私（島野）の研究室を卒業した学生が，神社林に出現する植物の種組成を研究してくれたことがありました．どんな神社に，どんな植物が生育するか，です．そうすると，実に様々な植物が生育していることが分かりました．多くの神社の場合，周りは住宅に囲まれていたり，あるいは農地（水田，畑）に囲まれたりしています．そうしたところにはヒメジョオンなどに代表される外来雑草が非常に多いのですが，神社林の中ではこうした帰化植物の割合が周りに比べ低いことが分かりました．さらに，境内に小川が流れていたり，木立の下にあることで，湿地の植物や，通常山地に生育し，住宅地や農地には生育しないような植物がいくつも見られることが分かりました．ウワバミソウ，シロバナエンレイソウ，ウバユリなどです．こうした植物は，我々の身近に神社がなければ自然には生育できないわけで，平坦部に神社が点在する集落の構造は，なかなか我々が見られない植物との出会いを我々に与えてくれ，また，その地域における植物のレフュージア（逃げ場所）を担っていることが分かりました．ちなみにこの研究は，景観生態学会という学術研究会に認められ，田村・島野 2009「長野県松本盆地の神社林が提供する植物の生育環境の比較」というタイトルで，出版されました．

ヒトリシズカ

シロバナエンレイソウ

ともに御射神社秋宮．松本市

重層的な諏訪大社の神祭り

私（島野）も，上記のような興味もあり，県内外の神社をみてまわります．しかし，信濃の国一宮である諏訪大社の御祭神，神祭りについては，これほど複雑なところもないのではないかと思います．現代から遡ってみます．

・現在

祭神は建御名方命（たけみなかたのみこと），八坂刀売命（やさかとめのみこと）とされています．これは上社，下社とも，です．ですが，もう少し詳しく見ると，上社に建御名方命，下社に八坂刀売命が祀られていると考えて良さそうです．というのは，諏訪湖が凍り，膨張して浮き上がった氷の跡が，上社の建御名方命が下社の八坂刀売命に会いに行く，という伝承があるからです．さらに，下社春宮の拝殿の脇に摂社があり，ここに建御名方命が祀られているのです．ということは，本体の拝殿では建御名方の神を祀っていないことになります．

そのほかにも摂社を見てみると，ちょっと興味深いことが分かります．下社秋宮，上社本宮には大国主社（建御名方命の父神である大国主命を祀る）や，出早社（いずはやしゃ，建御名方，八坂刀売の両神の御子神をまつる）があって，これは，建御名方の命，八坂刀売命に縁のある神様です．これはわかりやすいですね．下社にはさらに鹿島社の武甕槌神（たけいかずちのかみ）も祀られています．この神は，国譲りに反対した建御名方命をやぶり，諏訪の地まで追いやった神です．こうしたライバル（敵？）神まで祀るところは日本神道の懐の深さといえます．

・明治 4 年まで続いた中世からの祀り

明治 4 年までは上社の大祝（おおほうり）は諏訪氏，そしてそれを支える神長官の守矢氏が諏訪社の祭祀を行っていました．これが明治 4 年にすべての神官社家の世襲を廃し,神祇官および地方庁に神職の任免権を与えることとなりました．そしてこのころ、神霊の憑依やそれによって託宣を得る行為などが低俗なものや迷信として否定され，多くの民俗行事が禁止されたそうです．諏訪の大祝には神が下りる，つまり現人神のようになるわけで，これは明治天皇のみを現人神とする明治政府にとっていいわけはありません．これによって長く続いた諏訪の祭りの本質的な部分は消されてしまいましたが，これがどんなものかを振り返っていましょう．

大国主命（父神），事代主命（兄神）の国譲りに反対し，武甕槌神と戦い，諏訪の地に追われた建御名方命は，諏訪の地の先住民族，守矢（洩矢，とも）氏と戦い，諏訪の地にとどまったとされます（「諏訪大明神画詞」）．建御名方命の子孫は大祝として，そして守矢氏は神長官として祭祀をします．神長官の守矢氏が大祝に神を下ろし大祝子が託宣を行ったようです．神長官守矢氏が大祝に下ろした神がミシャクジと呼ばれる神です（宮坂光昭 1992「諏訪大社の御柱と年中行事」）．このミシャクジ神ですが，土地神，土地の精霊と考える

とわかりやすいと思います．諏訪の考古学者，藤森栄一は巨木，巨岩，尖った石，棹などをミシャクジ神の降りる場所としています（「諏訪大社」中央公論美術出版）．石と木ですね．

樹木については，カヤの木をミシャクジと呼んだり（北村皆雄 1975「ミシャグジ祭政体考」『古代諏訪とミシャグジ祭政体の研究』），アサダの木をミシャクジと呼んだり（増澤光男 1995「諏訪風土記」）する人もいるようです．こうした神気をおろす大きな樹木は「湛えの木」と呼ばれているようです．湛え（たたえ），とは容器がなみなみと水をたたえる，の湛えで，神気が満ちる，ということでしょう．

ミシャクジそのものをまつる神社の例
御頭御社宮司社．諏訪市

塩竈神社の末社として
まつられる例．松本市

一方，石棒をミシャクジ神のご神体とする場合があるようです（北村，同）．この石棒ですが，縄文時代からこの地方にあることが発掘で分かっています．一般に石棒は石皿とペアで男性器，女性器をかたどったとされ，子孫繁栄や豊穣のシンボルや，それを願うための祭祀器と考えられています．男根崇拝などは多くの地方で見られるようですが，松本地方でも見ることができます．道祖神の脇に祭られていたり，神社の境内にあったりします（写真）．

塩尻の縄文遺跡から出土した石棒．
約 3000 年前

松本市の八坂神社にまつられる
男神，女神．子宝の神とされる．
八坂神社の御祭神は素戔嗚尊なので一見関係ない

生島足島神社（上田市）のケヤキ．洞の内部に男神，女神がまつられる．

こうして考えていくと，諏訪の祀りは，表面的には建御名方神，八坂刀売神を掲げながら，その内実は，縄文時代からつづく自然信仰であったと考えることができます．これは，**諏訪大社 4 社とも，本殿がないことが一つの一つの証です**．あるのは，拝殿，そして通常は拝殿と本殿をつなぐ幣殿のみがあります．本殿はありません（前宮のみ，伊勢神宮の社殿を移したため本殿に見える建物がある）．それは，山やそれを囲む自然をご神体と考えていたからではないでしょうか．こうした観点から，御射山社について触れたいと思います．

御射山社

御射山社は諏訪大社の奥宮とされています．上社，下社ともにあります．下社秋宮はほぼ北東を向いています．我々が拝殿から参拝するとき，北東を向きますが，この先有るのは何でしょう．本殿はありません．ご神木のイチイの木があります．ですが，これをずっと行くと霧ヶ峰の，八島湿原付近になります．ここにあるのが下社の旧御射山社です．

御射山社があるのはどんなところかというと，周りが山に囲まれ，水がわき出すところです．これは上社も下社も一緒です．下社の御射山社はは江戸時代には皆さんが見た（見る）旧御射山社から現在のところに移されていますが，やはり地形的には同じような場所で，山に囲まれ，水がわき出るところです．

御祭神はというと，建御名方神はもちろんですが，なんと国常立大神です．国常立大神はどんな神様かというと，地球の神様です．太陽が天照大神，そして地球の神が国常立大神です．

通常，山の神様を祀るときは，古事記に出てくる大山祇神（おおやまつみのかみ）など

を祀ることが多いですが，なんと地球です．当時，地球という概念はなかったでしょうから，「国土」を神として祀っていたということになります．

下社御射山社の国常立大神社（下諏訪町）

上社御射山社の国常立大神社（富士見町）

上社の本宮は前宮を向いています．南東方向です．でこれをさらに延ばして行くと，やはり御射山社にたどり着きます．この御射山社はどちらを向いているかというと，今は社の位置が変わっていますが，参道の向きからすると，八ヶ岳を向いていることになります．上社前宮はどこを向いているかというと，先の守矢氏と関わりの深い守屋山です．ここには磐座があり，かつて雨乞いの祈祷などが行われたということ．ということで，上社本宮は八ヶ岳に向く御射山社と，守屋山に向く前宮を向いているということになります（過去には本宮も守屋山を向いていたといわれる）．我々が本殿のない上社本宮で何に対して参拝をしているかというと，この地域の国土を象徴する八ヶ岳，そして赤石山脈（南アルプス）の北端である守屋山ということができるのではないでしょうか．

縄文時代から石棒などを使って行ってきた自然崇拝は，山に囲まれ，水がわき出す御射山社に祀られる，国常立大神に見て取れると言っていいのではないでしょうか．そしてそれこそが諏訪大社の元々の祀りだったのではないでしょうか．

全国に広がる諏訪神社

諏訪信仰は中部地方を中心に，北海道から九州・沖縄まで 2616 社があるといわれます（世界と日本 大図解シリーズ 814 号）．風神，水神，狩猟神，そして軍神としてあがめられています．一方，建御名方をやぶった武甕槌神をまつる鹿島社は 604 社です．なぜ負けた方の建御名方神をまつる諏訪社の方が多いのでしょうか．また，なぜ負けた諏訪大明神を軍神としてあがめるのでしょうか．

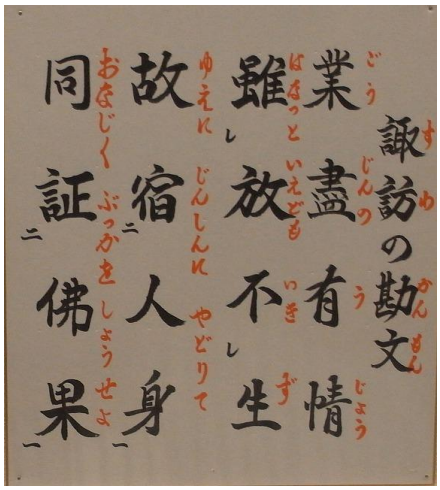
これには下社大祝の金刺盛澄（かなさし もりすみ）と源頼朝との関係を見ると分かるのではないでしょうか．ともに平家を打倒する立場でしたが，金刺氏は木曽（源）義仲について戦ったといわれます．木曽義仲は平家をおい，京に上るも，その後，源頼朝が使わす義経に敗れます．木曽義仲についた金刺氏も頼朝に死刑と定められ，梶原景時に預けられることになりました．あるとき，景時の計らいで，頼朝はじめ鎌倉の侍の面前で流鏑馬の

芸を披露することになりました．

荒馬が与えられましたが，これを難なく操り，まず八つの的すべてを射落としたそうです．頼朝はじめ皆驚いたそうですが，頼朝に「今一度射よ」命ぜられます．的がないことを答えると，今の破れた的を使え，とのこと．金刺盛澄は，しかし，これも全部射落とします．すると頼朝は，次に「的の串を射よ」との命．盛澄はさすがにこれは難しいと思うと，諏訪大明神に一心に祈りを捧げ，八つの串すべてに矢を命中させました．これを見た頼朝は，これは人間業ではない，神のなせる技であろう，と諏訪大明神の信仰心を深めたということです．これによって金刺盛澄も助命されました（諏訪大明神画詞を改変）．これが武士を中心に諏訪信仰が広がるきっかけの一つでしょう．旧御射山社で武芸を披露（奉納）するのも，こうした事がきっかけではないでしょうか．

もうひとつは，江戸時代（だと思いますが）狩りなど殺生が好ましくない，とされるようになった事がありました．仏教の影響もありましょう．しかし，諏訪社だけは「狩りは神事である」ということから諏訪社の氏子は神事として狩りをすることができたということです．こうしたことがあって，武士らに諏訪信仰が広まったと考えられているようです．また，諏訪大社が発行した鹿食免（お札）があればその肉を食べても許される，ということがあって，これも諏訪信仰が広がった理由の一つだと考えられます．

「諏訪の勘文（かんもん）」といいのがありまして，現代語にすると，「前世の因縁で宿業で生きた生き物は，放ってやっても生を全うできない．それ故に人の身に宿して人とともに成仏させるのだ」といった内容です．神仏習合の影響を見ることができます．ちなみに，鹿食免は今でも諏訪大社で発行されています．千円．



諏訪の勘文

御座石神社（茅野市）の石．
建御名方の神の母神，高志沼河姫命は糸魚川地方から大門峠を下り，鹿に乗ってこの地に入ったとされる（先代旧事本紀）．その鹿の足跡が付いたとされる石．